

大学

アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2004. 3. 25 No.30

Eastern Japan Section, The Japanese  
Association of College and University  
Archives

## 目 次

- ・折田悦郎「国立大学アーカイブ私論」…………… 1
- ・藤田順子「駒澤大学禅文化歴史博物館を見学して」…………… 5
- ・西口忠・松崎彰「全国大学史資料協議会2003年度総会・全国研究会の記録」… 6
- ・山口拓史 全国研究会「第1分科会の記録」…………… 9
- ・村松玄太 全国研究会「第2分科会の記録」…………… 11
- ・平佐枝子「全国大学史資料協議会2003年度総会  
ならびに全国研究会に参加して」…………… 13
- ・全国大学史資料協議会2003年度総会議事録(抄)…………… 14
- ・全国大学史資料協議会2003年度役員会議事録(抄)…………… 16
- ・全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録(抄)…………… 16
- ・全国大学史資料協議会東日本部会研究部会記録(抄)…………… 18
- ・全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿…………… 19

2003年11月20日(木) 研究部会

## 国立大学アーカイブ私論

九州大学大学史料室 折 田 悦 郎

## はじめに

私の所属する組織の名称は、「九州大学大学史料室」である。部会の名簿等で正しく記されることは殆どない。「九州大学史料室」「九州大学史史料室」などによく間違われるが、「大学」全体に関わる組織ということから、このように名乗っている。それから、本報告の参考文献としては、富永一也「公文書館論」(『沖縄県公文書館研究紀要』3号)と、拙論「国立大学におけるアーカイブの設置とその機能」(『京都大学大学文書館研究紀要』1号、以下、本報告では「拙論」と略

記)を挙げた。最初に確認しておきたい。

私が大学アーカイブを改めて考えてみようと思った直接のきっかけは、2年前の全国大学史資料協議会全国研究会分科会での議論であった(於神奈川大学)。「大学アーカイヴズの運営」というテーマながらアーカイヴズについての定義はなく、例えば「資料収集は地道な作業である」といった議論がなされたように記憶する。そのときの紹介は「拙論」でも行ったが、このような一種情緒的ともいえる言説には、富永一也氏も批判的である(例えば、2002年12月、京都大学大学文書館主催



報告する折田悦郎氏

「大学アーカイヴズに関する研究会」での講演。大学アーカイブの活動には、何よりも冷静な判断に基づいた戦略と将来構想、そして確固たる理念(アーカイブの定義\*)が必要である。

### 国立大学アーカイブ、九州大学の最近の状況について

そのためには、国立大学アーカイブの歴史と現状を把握しておかなければならないが、各々の歴史については「拙論」にも記したので省略し、「拙論」以後の動向について概観することにしたい。まず他大学の動向では、やはり京都大学大学文書館の活動と、広島大学における大学文書館設置の動きに注目すべきだろう。膨大な移管行政文書、広大な施設、研究会の組織や研究紀要の発刊といった活動は、京都大学の充実ぶりを知るに十分である。広島大学は「文書館設立準備室」を設置し、本年4月の開館を目指している。

一方、九州大学における新たな動きは、①2001年6月の文書館設置準備委員会の設置、②副学長(附属図書館長)の大学史料室長への就任(従来の室長は副室長)、③元事務官の任用、④「九州大学の中期目標・中期計画」(学内措置)に大学史料室の基本的な考え方を記述したこと、等を挙げることができる。

①については、委員会での議論が進むうちに、「文書館」とは古文書や近代産業資料の収集・保存を中心に行うところであるということになり、「大学文書館」(大学アーカイブ)は大学行政文書を収集する組織であるという本来の構想=大学史料室の構想とは、異なった形になっている。②は大学史料室が大学のより中枢に位置づけられたもので、その意義

は大変に大きい。③は国家公務員再任用制度を利用して、大学史料室に事務官の任用がなされたもの。事務局経費によるものだが、事務官の大学史料室への直接の参加は実際の行政文書の移管や文書の整理等に絶大な「効果」を発揮している。④は学内に認知された組織として、明確な目標とその達成が義務づけられたことを意味するものである。

### 大学アーカイブの収集資料について

一部ではあるが(例えば歴史研究者)、大学アーカイブはいわゆる古文書も収集すべきだとの意見がある。しかし私は、アーカイブとは「機関に必置の組織」であり、収集する資料は「親機関の生産(授受)した事務文書」が中心になるべきだと考えている。これは、前記富永氏や寺崎昌男氏のアーカイブ論、資料論を受けたものだが、大学アーカイブの活動を続けている者にとり、第一に問題にすべきは、情報公開法の期限が終わればアーカイブの目を通ること無く、大量に廃棄される大学行政文書である、と考えるからに他ならない。

従来、大学での古文書管理は、附属図書館や博物館、学部・講座等で行われるのが一般的であった。独自の古文書館設置が可能であれば問題ないが、そうでない場合、もう少し図書館等との連携がはかられてもよいのではないか。この点、前述した九州大学の設置準備委員会では附属図書館との連携を考慮した「案」が検討されており、注目される。

ところで、収集資料に関して古文書の問題を取り上げたのは、この問題を語るときにこそ、各自のアーカイブ観が最も鮮明に現れるからであり、また施設・人員等の合理化という側面からは、今後も行政文書と古文書との関係が問われ続けると予想されるからである。大学アーカイブと古文書保存機関等との連携は、それが単なる組織の拡張策や延命策でないか、大学アーカイブの理念に照らして慎重に検討される必要がある。

一方、大学に関係する「モノ」資料については、大学史料室では積極的な収集を行っている。最近では初代京都帝国大学福岡医科大学長関係の資料や、戦前期九州帝国大学の総

長関係資料の受け入れを行った。このほか力を入れている収集活動に、「拙論」でも詳述したオーラルヒストリーがあるが、これは、アーカイブは過去の資料だけを集めるのではないという考え方に基づくもので、現在は前副学長のインタビューを行っている。またこれと同様、キャンパス移転を前にした現況の写真・映像を残すプロジェクト（「九州大学「記憶の保存」プロジェクト」）も進行中である。

### 研究、教育、広報、展示活動

大学アーカイブの研究機能について、歴史研究から述べることにしよう。拙論でも触れたように、アーカイブは一般の歴史研究を行うところではない。それでも歴史を云々するのは、どのような親機関も歴史的に形成されたものであり、現在のありようを理解するには歴史的なアプローチが最も適当であるからだ。だからその研究対象は、あくまでも親機関の歴史が中心となる。それ以外の研究機能としては、資料収集・公開等に関するシステムの研究や親機関の組織論的研究が考えられるが、研究体制としてはいずれも一現在の専任スタッフの規模を考慮すると一共同研究の構築が有用であろう。そのような観点から、大学史料室ではこれまで八つの共同研究を推進してきた。なお、この研究体制という点については、次の二点も指摘しておきたい。一つは、現在達成されていない教官複数化の問題。それからもう一つは、大学アーカイブ学会の設立についてである。この二つについては、後継者養成の観点からも、早急に取り組むべき課題だと思われる。

次に教育活動について。九州大学では自校史教育を積極的に行ってきたが、これに関しては最近少々気になる論調が見られるようだ。それは自校史教育の盛行を年史編纂（「百年史」等）に引きつけて説明する見解で、確かに自校史教育と年史編纂の関係は密接である。だが、少なくとも九州大学での事例でいえば、この両者は直接には関係しておらず、むしろ教養部解体等を背景とした学生の学力問題やアイデンティティの欠如が問題にされたことの方が、はるかに大きな要因であった。そし

てもう一つ、そのような問題が指摘され始めたときに、学内に大学史料室（アーカイブ）が存在していたという事実が重要だった。自校史教育は年史編纂の「後始末」から始まるのではなく、大学アーカイブ本来の機能によって行われる一つまり、アーカイブが主体的に自校史教育を行うのであり、たとえ「年史」が無くても自校史教育は可能ということだ。

研究・教育機能について述べたところで、両者に関係する「点検・評価」の問題にも触れておきたい。従来の「点検・評価」は、研究活動に対するものが主であった。しかし、大学アーカイブは、研究成果だけではない、例えば、教育活動や資料の収集・整理・公開、その他情報提供活動等に対する「点検・評価」システムの整備・確立も求めていく必要がある。そしてその際には、「良い沿革史を出しているか、大学資料保存のための努力を払っているか、といった項目が自己点検・評価の基準に想定さるべき」という、寺崎氏の提言が是非とも参照されるべきだろう。

講演、広報、展示活動については、大学史料室では職員研修、同窓会、「出前講義」（高等学校）での講師や、来学者・マスコミ等への対応を行っている。展示活動は場所の関係でいまのところ行っていないが、キャンパス移転後の新しい施設では活発に展開したい。これからの大学アーカイブにとり、展示（機能）をどう考えるか、あるいはどのように展開するかは研究課題の一つであり、また大きな可能性をひめたテーマでもある。

### むすびにかえて

先の「拙論」では、システマチックな資料収集や、年史編纂とアーカイブの活動を峻別すべきこと等を主張した—それは個人による業績や年史編纂の成果を否定している訳では無論ない—。今回の報告は、それもさることながら、アーカイブを中心にものを見てみるとどうなるのか、大学資料に関わる活動をアーカイブの本来的な機能としてとらえ直してみるとどうなるのか、といった仮説的な話をを行ったつもりである。

単純な二分論でかつ極めてラフなものであ

るが、例えば、大学アーカイブを考えたときに「①情緒的・他律的態度から理念的・自律的・戦略的態度に、②年史編纂の発想からアーカイブの意識に（臨時的組織から常置の組織に）、③歴史研究から情報の公開に（歴史学との親密性から大学事務機構との親密性に）、④創立期中心の資料収集から大学事務文書の収集に、そして紙資料だけではなくデジタル資料の収集に、⑤個人的な資料収集からシステムチックな資料収集に、⑥職人技からマニュアル化に（個人研究と同時に共同研究の構築に）、⑦過去だけではなく、現在・未来への志向に（オーラルヒストリーの実施等）、⑧年史編纂の後始末的自校史教育から、アーカイブによる複合的な教育活動に、⑨アーカイブの人員については単独から複数に、そしてマネージングプロフェッサーに、⑩年史編纂経験者（ベテラン）だけでなく、「若い人」達のいるアーカイブに\*\*」というように、意識的に発想を転換してみるのはどうだろうか。

今後、大学アーカイブの役割は益々重要になってくる。そのような中で、大学アーカイブを確立するには、各々が理念を掲げ活動を継続するのが、迂遠に見えても、そして最初は確かに大きな困難に直面しようが、結局は近道だろう。明確な理念は困難の中でも私達の意識を高めてくれる。

いうまでもなく、本報告には触れ得ていないテーマも多い。しかし、国立大学アーカイブの現状を見ると、それぞれに独自の活動を活発に展開していることを知ることができる。これは日本のアーカイブ活動の中では、注目されてもよい事実であろう。本報告が国立大学だけではなく、日本の大学アーカイブ活動をリードしてきた私立大学や、地域のアーカイブのあり方にいくらかでも寄与できるとすれば幸いである。

\*「拙論」や本報告で「アーカイブ」の理念・定義にこだわるのは、議論が「アーカイブ」に関してのものだからである。大学資料の収集・保存や年史編纂のあり方は様々にあつてよい（この点は何人も否定しないだろう）ゆえをもって、アーカイブも同様だと考える人



折田氏と司会の桑尾光太郎氏(右)

がいる。しかし、この態度は正しくないだろう。アーカイブについて論じるには、一定の定義（これはいくつか考えられるかもしれないが）のもとになされなければならない。このアーカイブの定義については、富永一也「われわれのアーカイヴズ」（『京都大学大学文書館研究紀要』2号、掲載予定）を参照。なお、同論文については富永氏のご厚意により原稿段階で参照させて頂いた。記して謝意を表したい。

\*\*但し、本文は枚数の関係で①～⑩の全項目については説明していない。またこれ以外の部分についてもその多くを省略している一例えば、アーカイブの第一の機能である資料の収集・整理・保存・公開をめぐる諸問題等一。それら本文で省略した部分については、本年度末に刊行予定の報告書『大学アーカイヴズ機能についての基礎的研究—「大学改革」との関連において—』（科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)）に、「国立大学アーカイブ私論—現状と課題—」として掲載する予定である。ご参照頂ければ幸いである。

ご 案 内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

【中央大学・大学史編纂課】

〒192-0393 八王子市東中野742-1  
☎ 0426 - 74 - 2132

【武蔵野美術大学・大学史史料室】

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736  
☎ 042 - 342 - 6091

2004年1月22日(木) 研究部会

## 駒澤大学 禅文化歴史博物館を見学して

武蔵野美術大学大学史史料室 藤田 順子

第39回東日本部会研究部会は、2004年1月22日(木)に駒澤大学の禅文化歴史博物館の見学会であった。

まず、禅文化歴史博物館長の岡部和雄氏からご挨拶をいただいた後、同館大学史資料室の皆川義孝氏から博物館と資料室についての説明があり、その後2チームに分かれて博物館内を見学した。

もともと駒澤大学の図書館「耕雲館」として1928(昭和3)年に建てられたこの建物は、2002(平成14)年の開校120周年記念事業の一環で博物館としてオープンした。旧帝国ホテルを建築したフランク・ロイド・ライトの影響を受けた菅原栄蔵による設計のこの建物は、外観が屏風を広げた形をしており、中央吹き抜けの展示室を囲むように他の展示室と資料室、収蔵庫などが配置されている。天井のスタンドグラス(差し込む外光の紫外線を防ぐフィルターがかけられている)と壁をふちどる幾何学模様と奥の須弥壇・一仏両祖の像と不思議な調和をしていて興味深い。1999年(平成11)年には東京都選定歴史的建造物として選定されたため、改修時には都からの補助も受けることが出来たそうだ。

1・2階は展示室と資料室、3階は収蔵庫、そして地下1階が作業室、実習室となっている。館内には車椅子が常備されており、エレベータ、また車椅子専用の手洗いも設けてあり、バリアフリーへの配慮もみられる。

最初に案内された収蔵庫には「正法眼蔵」などの経典を印刷した膨大な数の版木が保管してあった。版木は、82.5センチ×26.5センチと42.5センチ×21.0センチの二種類あり、大きい方は5枚、小さい方は10枚ずつ小分けにして、専用の収納箱に入れられている。禅僧による書・絵画も多数保管されているそうだ。次に見学した学芸員用作業室には、企画展示の準備をスムーズに行うための作業台・撮影台が置かれていた。また、年々増加する



展示解説をする皆川義孝氏

「学芸員」資格取得希望者を抱える博物館学講座の学習用施設として、実習室、鑑賞室(和室)、作業室も備えられていた。

展示室は大きく3つに分かれており、1階は禅の文化と歴史をテーマとした常設展示、2階は企画展示と大学の歴史をたどる大学史展示で構成されている。1階の常設展示は、さまざまな角度から禅の世界を紹介しており、禅の発祥から曹洞禅の確立、教団形成、歴代の禅僧紹介、禅の影響から生まれた芸術まで分かりやすく説明されていた。「正法眼蔵」「伝光録」をパソコンで全文検索することも可能である。そのほか、“起きて半畳、寝て一畳”が見てわかる畳の台も設置されていたり、修行僧の食事である粥と漬物の食品サンプルもあつたりと、親しみやすい感覚で禅の世界に触れることが出来るようになっている。

当日は、駒澤大学の前身である曹洞宗大学が駒沢に移転して90周年を迎えたことをとりあげた企画展示「駒沢移転90周年記念展」と、曹洞宗の祖である道元の特集展示「道元の足跡2004」が開催されており、合わせて見学した。

歴史をたどると、戦国時代後期に禅の参究と漢学の振興を目的として作られた「学林」までさかのぼることが出来る駒澤大学だが、ここ禅文化歴史博物館は、大学紹介のみならず、ある一つの文化を紹介する役割を果たしていると感じられる博物館であった。

2003年10月1日～3日 全国大学史資料協議会2003年度総会ならびに全国研究会

# 全国大学史資料協議会2003年度総会・ 全国研究会の記録

桃山学院年史委員会 西 口 忠  
中央大学大学史編纂課 松 崎 彰

## 1. はじめに

2003年10月1日(水)から3日(金)まで、全国大学史資料協議会2003年度総会および全国研究会が長崎大学と活水学院を会場として開催された。一昨年は神奈川大学、昨年は北海道大学を主会場として東日本部会が2年続けて担当するという変則的なかたちになったため、2003年度と2004年度は西日本部会が担当することになった。

北海道大会の後、直ぐに準備を進めたが長崎大学は会員校ではないため個人的な関係から長崎大学の教員にお世話をお願いすることになった。2003年4月に事前準備として西日本部会部会長校の立命館と庶務校の桃山学院が長崎に出向いて事前打ち合わせをおこなった。協議会の取組や総会・全国研究会の内容を詳しく説明することによって、2003年度総会における記念講演、2日目以降の全国研究会の特別講演、研究会テーマ、分科会の持ち方などがほぼ確定することができた。また、特別企画展示、記念講演と特別講演を長崎大学の公開講演としての位置づけることなどが確認された。その後、西日本部会2003年度第1回幹事会において事前打ち合わせの説明を行い、東日本部会へも企画案を提示することによって最終的な内容を確定した。

記念講演・特別講演の開催にあたり、後援を快諾くださった長崎大学、活水学院、長崎県教育委員会の各位と、準備から当日の運営にいたるまで、多くのご協力をいただいた長崎大学の担当教員の方々に、この場をかりて感謝を申し上げたい。

## 2. 全国役員会

10月1日(水)13時から、協議会役員会が長崎大学経済学部新講義棟講義室にて開催さ

れた。出席は、東日本部会が神奈川大学(監査委員)・慶應義塾(副部会長)・國學院大學(会計委員)・中央大学(運営委員、事務局)・東海大学(運営委員)・東京経済大学(運営委員)・東洋大学(会計委員)・武蔵野美術大学(運営委員、事務局)・明治大学(部会長)、西日本部会が関西大学(会報担当)・関西学院(副部会長)・甲南大学(副庶務)・神戸女学院(幹事)・同志社大学(会計)・桃山学院(庶務)・立命館(部会長)・龍谷大学(監査)であった。

議事内容として、①西日本部会庶務校から「長崎大会準備メモ」により説明があり、大会運営の役割等を確認した。②2003年度東西両部会の共同事業として「研究叢書」第5号の編集は西日本部会の担当とし、長崎大会の記録を中心に記録を掲載することとした。

また、全史料協、企業史料協等の史料保存団体との連絡窓口は西日本部会庶務校が担当すること、2004年度の総会・全国研究会は西日本部会の担当とし、京都大学大学文書館を会場として準備していくことを確認した。

③協議会規約の一部改正(総会欠席者の委任の扱いについて)を従来の慣例をふまえた内容であることを確認した。

なお、東日本部会からは『日本の大学アーカイヴズ(仮称)』の編集についての協力要請が西日本部会にあった。

## 3. 総会・記念講演

同日14時10分より2003年度総会を開催した。はじめに、協議会会長校である立命館の伊藤昇氏より総会開会にあたっての挨拶があった。次に、議長に関西学院の池田裕子氏、副議長に國學院大學の加藤貞敏氏を選出し、議事に入った。

総会において最初に事務局より役員会での報告があった。承認事項として「全国大学史資料協議会規約」第7条の改正案の説明があり、全会一致で承認された。なお、総会欠席届に「総会における決議は議長に一任する」などの文面を入れるなど次回総会時までに検討することとなった。また、共同事業として「研究叢書」第5号の編集については西日本部会が担当して刊行することを全会一致で承認した。その後、東日本部会、西日本部会の2003年度事業計画が両部会事務局・庶務校から報告があり承された。

東日本部会から『日本の大学アーカイヴズ(仮称)』の編集状況の報告があり、会員に対して協力依頼があった。また、西日本部会から、来年度の総会および全国研究会は京都にて開催予定との報告があった。総会終了後、15時より記念講演を開催した。講演に先立ち、今回の記念講演、2日目の特別講演は長崎大学、活水学院、長崎県教育委員会の後援を得、長崎大学の公開講演として実施することになったことを協議会会長校の立命館伊藤昇氏より紹介があり、また長崎大学学長齋藤寛氏より挨拶があった。記念講演にあたり、姫野順一長崎大学教授から講師の紹介があり、長崎大学経済学部柴多一雄教授による「武藤長蔵博士と武藤文庫」の講演があった。講演要旨は次のとおりである。

#### (講演要旨)

十年程前までは大学史の資料室(九州大学)にいた。武藤長蔵は明治14年の生まれで、兄の長平は七高、旧制一高、広島高等師範の教授、著書に「西南文運史論」などがある。長蔵は名古屋商業学校、東京高等商業学校を卒業、すぐに上海の東亜同文書院の教師となり、明治40年に長崎高等商業学校の教授に就任。明治44年からアメリカ、イギリスそしてドイツに3年半留学。留学中に慶応の小泉信三と親しくなる。昭和11年に55才で定年、名誉教授就任後も講師として高商の教壇に立たれている。昭和17年、61才で亡くなられた。

長崎高商は明治38年創立、全国で3番目の高商。明治17年に東京商業学校、明治35年に神戸高商。現在の長崎大学経済学部である。

当時の高等教育機関、帝国大学は東大と京大しかない、そういう状況の中で長崎高等商業学校の創立は九州長崎にとっては大きな出来事であった。九州帝国大学は明治44年に京都帝国大学の分校としての福岡医科大学(明治36年開校)と工科大学が一緒になって創立。法文学部ができるのが大正13年。九州に文科系の高等教育機関はこの長崎にしかなかったということになる。長崎には長崎医学専門学校があり、大正12年に長崎医科大学に昇格している(大正7年の大学令による)。

武藤博士は経済学史、経済学の歴史、鉄道論、銀行論、植民政策、交通論といった講義を担当されていた。講義の時間はいつも延長するが、実際は講義の内容とはあまり関係ない話が多かった。世界、長崎の話を通じて学生たちがいろんな事を学んだ。学期が終る頃になると、ガリ版刷りのノートを配布して一気に進む。

研究テーマは、鉄道論、経済学史、語源訳語、日蘭交通史、日ポ交通史などで、教育と密接に結びついていた。昭和12(1937)年、『日英交通史之研究』で慶應義塾大学より経済学博士の学位を受ける。また、地元長崎に関する研究では『長崎ぶらぶら節』の古賀十二郎、初代長崎県立図書館館長の永山時英、武藤先生をあわせて「長崎学の三奇人」と呼ばれた。

武藤先生の書物、資料は1万点、絵、陶器等は約200点。研究中心の資料だけでなく、幅の広い資料が集められている。

武藤博士が亡くなると、関係が深かった慶應大学、神戸大学、大阪大学、九州大学からも蔵書を譲ってほしいという申し入れがあったが、長崎大学に残され「武藤文庫」として長崎大学経済学部所に所蔵されている。

なお、今回の記念講演に併せて、経済学部図書館において「武藤文庫資料一般公開展」として10月5日まで開催された。

記念講演会の終了後、17時30分より講義室横の交流プラザにて、懇親交流会を開催した。藤本俊史氏(福岡大学)の司会により、協議会副会長の鈴木秀幸氏(明治大学)による挨拶

と藤江宗一氏(大阪国際学園)による乾杯の発声によって始まった。長崎大学学長の齋藤寛氏も出席され和やかな雰囲気の中で会員同士の親睦を深めた。閉会の辞は中村青志氏(東京経済大学)によりあった。

#### 4. 全国研究会

10月2日(木)、10時15分より全国研究会を開催した。開会にあたって鈴木秀幸氏から挨拶があったのち、特別講演として都野尚典氏(九州情報大学教授・長崎大学名誉教授)による「長崎市議会史と長崎大学五〇年史」があった。要約すると、1962年に長崎商業短期大学の助手になり、地域経済の調査とか研究会等を通じて、地域の歴史をするようになった。長崎県史、長崎市議会史の執筆、そういう中で歴史の書き方を学んだ。50年史の経済学部の99%を書いた。長崎市の開港都市、被爆都市としての都市形成と市議会。被爆都市と長崎大学本部キャンパス新設と市議会。教授会審議が大学史の中に反映されることが重要であり、議会史は議会議事録が補填資料となっている。歴史とは何か。歴史は解釈ではなくて、事実を述べるということであるということであった。

次の特別講演は姫野順一氏(長崎大学環境科学部教授)により「武藤長蔵と長崎学そして古写真研究」の話があった。第1のメッセージは写真データベースの紹介。約6,000点のコレクションを英語版を含めて世界に発信をし、イギリスあるいはアメリカのボストン美術館、展覧会、学会などから声がかかっている。第2のメッセージは武藤長蔵と長崎学とのつながりである。膨大な一万点の武藤文庫、アーネスト・サトウの原稿、フランス語の航海日誌、幕末に最初にやってきた宣教師ジョージ・スミスの著書など、翻訳の初期の本などコレクションとしても、非常にすぐれたものである。武藤先生の研究は日英交通史が基本であるが、銀行の語源、鉄道論、ポルトガルの使節が正保年間に来たときの大村文書、東インド会社の貿易史など、多岐にわたっていること。3番目は武藤個人の古写真である。高商時代の学生たちと、長崎駅前で、高商の

運動会、散髪屋(散髪屋のメモが残っている)での写真など。また斉藤茂吉をはじめ多くの人たちとの交流があり、留学時にはさまざまな人たちとの出会い、食事・本の領収書、音楽会のメニューなどが残されている。これらは武藤博士の研究業績の背景がわかる資料である。武藤博士は言う、学者の業績を評価するときは収集した文書・資料とその利用したことも考慮すべきだと。

休憩の後、協議会会員による問題提起があった。芦田文夫氏(立命館百年史編纂室長)による「自校史教育を考えるー立命館大学の場合ー」と西山伸氏(京都大学大学文書館)による「大学における資料保存の現状についてー大学アーカイヴズに関するアンケートよりー」である。その後、二分科会にわかれ、意見交換を行った。

第1分科会の出席者は、飯田克己・宇野武・加瀬大・加藤貞敏・澤木武美・三瓶美和子・鈴木秀幸・高埜則和・皆川義孝・吉田篤子(以上東日本部会)、芦田文夫・池田裕子・伊藤昇・折田悦郎・土山敏夫・浜下昌宏・藤江宗一・山口拓史・山下靖子・若山晴子(以上西日本部会)、第2分科会の出席者は、石田順二・伊藤昌弘・井上高聡・齊藤研也・斉藤高夫・神谷智・平佐枝子・豊田徳子・永田英明・中村青志・西山伸・馬場弘臣・福田欣治・藤田順子・松崎彰・村松玄太(以上東日本部会)、大野愛子・菊永省吾・小池聖一・高松千博・西口忠・原登久雄・深川晃而(以上西日本部会)の各会員であり、他に活水学院(安藝真由美)から参加をいただいた。

10月3日(金)は活水学院に会場を移した。廣畑讓理事長・院長から挨拶があったのち、活水学院の歴史を紹介する映画「わが心に刻まれし乙女たちを」を觀賞した。また、旧東山居留地内にある活水学院同窓会の建物(洋館)および「長崎市旧居留地私学歴史資料館」の展示資料を見学した。このあとは、東山手重要伝統的建造物群保存地区内にある洋館での見学など各自自由に散策した。



## 5. 参加者

大会参加者は、以下の通りであった。

## ＜東日本部会＞

神奈川大学、國學院大學、慶應義塾、  
駒澤大学、成蹊学園、専修大学、拓殖大学、  
中央大学、東海大学、東京経済大学、  
東京電機大学、東北大学、東北学院、  
東洋大学、武蔵野美術大学、明治大学、  
井上高聡（北海道大学125年史編集室）  
神谷智（名古屋大学大学史資料室）  
東田全義（前慶應義塾）  
西山伸（京都大学大学文書館）

## ＜西日本部会＞

大阪国際学園、関西大学、関西学院、  
甲南大学、神戸女学院、西南学院大学、  
同志社女子大学、同志社大学、広島大学、  
福岡大学、桃山学院、立命館、龍谷大学  
折田悦郎（九州大学大学史料室）

原登久雄（元桃山学院）

山口拓史（名古屋大学大学史資料室）

東日本部会 = 28名

（内訳：16大学24名、顧問・個人会員 4名）

西日本部会 = 21名

（内訳：13大学18名、個人会員 3名）

総計 = 49名

（内訳：29大学42名、顧問・個人会員 7名）

\*会場校 齋藤 寛（長崎大学学長）

若木 太一（長崎大学図書館長）

井出 弘人（長崎大学講師）

中田 秀夫（活水女子大学教授）

安藝真由美（活水女子大学図書館）

\*講師 柴多 一雄（長崎大学教授）

姫野 順一（長崎大学教授）

都野 尚典（長崎大学名誉教授、  
九州情報大学教授）

## 第1分科会の記録

司会 甲南大学広報部 土山 敏夫  
記録 名古屋大学大学史資料室 山口 拓史

## はじめに

自校史教育をテーマとする第1分科会では、芦田文夫氏（立命館大学）の問題提起「自校史教育を考える—立命館大学の場合—」を契機として、22名の参加者を得て議論がなされた。以下、第1分科会の概要を紹介する。

## 1. 芦田氏による問題提起(骨子)

立命館大学では、2002年度から一般教育特殊講義「日本近現代と立命館の100年」（全学共通・半期14回講義）として自校史教育を実施している。開講の趣旨は、学生に対して、自らが学んでいる場というものを考えさせること、大学で学ぶことの意味や意義を自覚させることにある。また、自校史教育は、『立命館百年史』の編纂と密接に関わらせて同編纂室が母体となって行っている。本日は、立命

館大学の自校史教育の現状を踏まえながら、問題提起を行いたい。

①大半の学生は、自校史教育によって初めて自分の大学の歴史を知るとというのが現状である。大学のよい面と同時にマイナスの面を知りたいという学生の要望がある中で、学生自身を大学改革に主体的に関わらせるためにも学生参加型の授業形態をどのように作り出すのが問題である。

②自校史教育において、「立命館を通して日本の近現代を見る、日本の近現代の中で立命館を見る」ことが追求されている。講義の体系性を確保するためには、日本の近現代史や大学論（私学論）と自校の歴史をどのような比重で取り扱うのか、あるいは戦前と戦後の比重をどうするのか等の検討が必要となるのではないか。

③今日、「大学改革」が極めて現代的課題として存在する。大学史編纂、さらには『大学史』に基づく講義では、大学改革についてもきちんと歴史的な視点から問題提起を行うことが重要になる。時流に流されない歴史的視点から現在の大学を捉えることで、学生のみならず多くの教職員に対して「大学改革」の課題を共有化させる機能を自校史教育は持つ



ているのではないかと。

## 2. 分科会における主な議論

芦田氏の問題提起に対する第1分科会での議論の概要は、次のとおりである。

分科会の冒頭、議論の進め方について司会者から提案があり、前半は、第2分科会資料[別紙2]（「大学アーカイヴズ」に関するアンケートⅡ-6 教育研究活動への関わり）を活用して、各大学における自校史教育の事例報告に中心が置かれた。また、分科会の後半は、前半の内容を踏まえながら、自校史教育を今後どのような方向で進めていくのか等についての意見が交わされた。

分科会前半の事例報告では、神戸女学院（「大学論」「初期神戸女学院」）、九州大学（「九州大学の歴史」「大学とは何か—ともに考える—」）、慶応義塾（「慶応義塾入門」）、明治大学（「日本近代史と明治大学Ⅰ・Ⅱ」）等の事例が紹介された。そして、これらの事例報告および質疑を通じて、次のような現状が明らかになったといえる。すなわち、①いわゆる「建学の精神」の継承に一定の重点を置く私立大学では、受講学生の意識とのギャップに苦慮することが多い。今日においては、学生だけではなく教職員もユニバーシティ・アイデンティティに対する関心が薄いことが原因として考えられる。②カリキュラムの体系的性を維持するために複数の講師によるリレー式講義を展開する際、内容の重複等を避けるために各講師間の密接な連絡が欠かせない。③専用テキストの使用は、体系的カリキュラムの提供に寄与するものである。しかし、レジュメ配布方式の方が学生の受講態度が良好

であるかも知れない。④学生参加型の授業形態が必要であることを痛感するが、実際の方法を見出せない。

次いで、分科会の議論は、自校史教育とアイデンティティ確立の問題に論点が移行した。この点については、いずれの大学においても「母校愛」「愛校心」を目的とした自校史教育を志向することはなかった。ただし、参加校の暗黙の共通認識として、〈自校史教育の結果（副次的産物）として学生が自発的に「母校愛」等を持つことを期待する〉という図式で説明せざるを得ない現状をどのように評価するのかという課題が明らかになったとも考えられる。その一方で、自校史教育の目的は学生や教職員のモチベーションを向上させることにあり、大学の将来像を視野に入れた自校史教育が求められるとの指摘がなされたが、この点については今後における議論の深まりを予測させるものと考えられる。

分科会の後半は、今後の自校史教育の方向についての議論が中心であった。例えば、自校史教育をアーカイヴズの機能に位置づける観点からの指摘、大学組織内でアウトソーシング化が進む現状に着目した自校史教育の有効性の指摘等その視角は多様であった。後者は、学生と専任教職員のほかに非常勤教職員や外部委託業者等で大学が構成されることが一般化する現状において、自校史教育の多様な展開（汎用性）を示すものと考えられる。また、前者は、大学史編纂セクションにおける自校史教育を否定するものではないが、自校史教育の意義を十分に評価する立場から、自校史教育の継続性・安定性を確保する方法としてアーカイヴズ論に組み込むことを提起しているように思われた。しかし同時に、アーカイヴズ・セクションを持つ大学がまだ例外的であるという日本の現状において、前者の指摘が本格的に議論されるまでには今なお時間が必要であるかも知れない。

## おわりに

自校史教育をテーマとした今回の第1分科会に参加して、改めて気づいたことがある。それは、「自校史教育」という用語が極めて

多様な論点を混在させているということである。例えば、自校史教育の主体(提供者)は誰であるのか、自校史教育の客体(受益者)は誰なのか、自校史教育カリキュラムはどうあるべきなのか、自校史教育の教材はどうあるべきなのか、自校史教育の場は何処なのか等々広範な論点を設定することが可能であろう。恐らく、それは自校史教育の多義性を示すものであるに違ひなく、今後の議論を有効に行うためには議論の不要な拡散をできるかぎり回避する方法を考えることが重要となってくるのではないだろうか。その意味において、少なくとも本大学史資料協議会の研究(部)会レベルにおいては、自校史教育論全体の構造化を意識しながら各論的にアプローチするという方法論を考えるべき時期に来ているのではないかと感じた。

## 第2分科会の記録

司会 武蔵野美術大学大学史史料室 石田 順二  
記録 明治大学史資料センター事務局 村松 玄太

第2分科会は研究会全参加者出席のもと、西山伸氏(京都大学大学文書館助教授)が、「大学における資料保存の現状について―大学アーカイヴズに関するアンケートより」という演題で問題提起を行った。

東日本部会では、『日本の大学アーカイヴズ(仮称)』(同部会より刊行予定)への収載を目的として、全国の会員校を対象に大学アーカイヴズに関するアンケートを実施した。その結果59校(うち東日本部会36校、西日本部会23校)から回答を得た。西山報告は、このアンケートの集計結果をもとに、各大学の資料保存機関の現状と、その取り組みについて論じたものであった。

まず西山氏は今回のアンケートの問題点として、会員校の組織形態が大学によって様々であり、比較を困難にしている点、国立大学の独立行政法人化以前にアンケートを実施し

たため、今後予想される改編を反映できていない点を挙げた。西山氏はそれらの点を今後の課題とした上で、一方ではアンケートから一定の傾向が伺えることを指摘し、各大学の資料保存機関の掲げる設置目的を次のように大別した。すなわち①年史等の編纂②資料の収集・整理・保存③資料の公開・展示④調査・研究⑤その他である。西山氏は近年設置された組織は①よりも②③④の項目に重点を置く場合が多いことを指摘した。

次に西山氏は、アンケートで大きな相違が見られた点を報告した。機関の担当者と情報公開に関する項目である。とりわけそれは私立大学と国立大学との相違として現れたことを西山氏は指摘する。前者について、私立大学では該当セクションに事務職員(嘱託職員等含む)のみを置くところが多く、教員が置かれるのはきわめて例外的である。他方国立大学では、資料保存機関に専任教員が置かれ、庶務業務を別途他部署が担当しているケースが多い。後者に関しては、国立大学では成文化された資料公開基準を持っているのがほとんどなのに対して、私立大学では有していない機関が大部分である点を指摘した。

最後に西山氏は、資料保存機関の組織形態やその業務が変化を迎えていることを指摘し問題提起を締めくくった。その内容は第一に98年以降大学資料保存機関が急速に増加していること、第二に情報公開への対応が明確化されつつあること、第三に展示活動の多様化についてであった。

西山報告を受け、第2分科会の参加者は会場を移し討議を行った。分科会への参加者は21大学24名であった。第2分科会の司会は武



蔵野美術大学の石田順二氏がつとめ、記録は村松が担当した。

分科会では西山氏が補足コメントを行って論点を絞り、それを受けて該当する会員校が具体的な報告をし、議論を深める方式が取られた。討論は資料の保存・整理・公開・活用を中心に据えたものとなった。論点は以下の四つに分けられる。

第一に、所蔵資料の性格により異なる収集・整理の方法についてである。西山氏は、各大学が所蔵する資料は現用・非現用資料、写真資料、公文書、私文書といった様々な性格を有しており、それぞれの収集・整理に関して相違があって一括するにはできない点を指摘した。また、資料の総点数をアンケートに記載しなかった大学が多かったことから、総点数を把握する困難について触れた。

それを受けた各校から、資料別の収集および保存の実態、資料の点数把握について報告がなされた。非現用文書を約40,000点所有する明治大学の事例に関して村松は、『明治大学百年史』編纂時から収集してきた資料を封筒に封入してその内容の表書きを行い、資料の累積目録を作成しているが、一方で整理作業がまだ十分に進んでいないことを紹介した。個人資料を36,500点有する名古屋大学について、同大の神谷智氏から、教員が退官する際にその資料を譲り受けることが多いこと、あらかじめ資料室の刊行物を学内に配布し、資料の受け皿としての存在を周知させていることが報告された。図書資料を約35,000点所蔵する慶應義塾の福田欣治氏は、寄贈図書の受け入れが多く、図書目録を作成した上で、図書が重要なものか否かを選別し、当面必要でないものについては外部の倉庫に預けている事例を紹介した。写真資料を約10万点以上有する中央大学の松崎彰氏からは、学内で広報、卒業アルバム業者ならびにアルバムを刊行する事業部、そして退職する教職員から写真を借り受けて複写する作業を行ったこと、学外にも関連する写真資料を幅広く求めていったこと、収集した写真を受け入れ順に通し番号を付して整理したことが報告された。同氏は今後の整理方法の見直しや、写真資料のデジ

タル化を進めていることについても言及した。

資料点数を把握する難しさについては桃山学院大学の西口忠氏から、収蔵スペースの問題や、通常業務との関係から、十分に資料整理や点数把握することが困難であるとの指摘があった。

これらの議論を通して、資料目録の作成方法が討論の対象となった。とりわけ文書単位に内容を取る件名目録を作成するか、簿冊単位の目録を取るかが論点となった。成蹊学園の伊藤昌弘氏は、昨年から学内行政文書の所在を把握するため、各部署所管資料について簿冊単位の目録を作成していることを報告した。対して東洋大学の豊田徳子氏は、『東洋大学百年史』の編纂過程で簿冊中の文書を件名別にコピーをし、分類整理したことを紹介した。神谷氏、東海大学の馬場弘臣氏からは、簿冊中の個別文書について把握するには件名目録を取ることが重要であるが、きわめて手間のかかる作業であり、現在も試行錯誤を繰り返していることが報告された。

第二に資料の公開基準が論点となった。西山氏は、何らかの形で資料の公開を行っている大学が大部分を占める一方、私立大学では成文化した公開基準を設けているところがまだ少ない点、また公開基準が個人情報保護の観点から、取り扱いの難しい問題を数多く孕んでいる点を指摘した。

西山氏のコメントに対して、東京経済大学の中村青志氏から、京都大学大学図書館では教授会資料などを公開しているのか質問があった。西山氏はその資料が人事案件などを含む場合には、ケース・バイ・ケースで公開・非公開を決定していると回答した。また刊行中の資料集に教授会議事録等を掲載している神奈川大学の事例として、同大の齊藤研也氏は、個人のプライバシーに関わる部分については内部の判断で伏せた上で掲載していることが報告された。広島大学の小池聖一氏は、部局の問題として、文書管理と情報公開の窓口が一本化していないため、対応が難しいケースがあることを報告した。

第三に教育研究活動についてである。自校史教育とそれに関する研究が圧倒的な割合を

占めるなかで、記録資料管理システムの研究・開発および、情報公開等に関心を置いた教育活動なども散見されることが西山氏からコメントされた。その点に関して神谷氏から名古屋大学の事例報告がなされた。

第四に展示活動に関してである。常設展では自校史を通史的に展示したり、創立者を中

心に取り扱う傾向が指摘された。他方企画展では、キャンパスや、特定の時期・人物・建造物、前身校を取り扱うなど様々な形式があることが指摘された。この点につき、同志社女子大学の菊永省吾氏から自校で実施した各種企画展に関して報告がなされた。

## 全国大学史資料協議会2003年度総会ならびに 全国研究会に参加して

専修大学大学史資料課 平 佐枝子

2003年10月1日から3日にかけて、全国大学史資料協議会2003年度総会ならびに全国研究会が長崎市で開催された。1日目は総会・記念講演・懇親交流会、2日目は全国研究会において特別講演2本と分科会、3日目は活水学院作成の学院史ビデオの紹介と活水学院史資料展示見学、旧東山居留地周辺の自由散策という日程であった。

このうち1日目に行なわれた長崎大学経済学部教授柴多一雄氏の記念講演「武藤長蔵博士と武藤文庫」および2日目に参加した第2分科会についてふれてみたい。

柴多氏の講演は、長崎大学経済学部の前身である長崎高等商業学校の教授を長年勤められた武藤長蔵博士と、昭和21年の創立40周年記念式典に際して長崎高等商業学校の同窓会から寄贈された武藤博士収集の蔵書・資料(和洋図書・雑誌・小冊子類約1万冊、地図・書画・陶器などの資料約200点)についてであった。武藤博士は明治14年に愛知県津島市で生まれ、東京高等商業学校を明治38年に卒業したのち東亜同文書院を経て、設立間もない長崎高等商業学校教授に就任、明治44年には商業学研究のためアメリカ、イギリス、ドイツへ3年間留学し、昭和11年に退官。その後も昭和17年に亡くなるまで名誉教授として学生の教育指導を行なった。博士の専門は鉄道交通や経済学史、日本と各国との交通史などであったが、研究は専門分野にとどまらず、

### 2003年度総会・全国研



講演する柴多一雄氏

歴史学、人文社会学、地元長崎に関する研究である長崎学などに及び、収集資料も広範囲の種類、内容が含まれているという。柴多氏は武藤博士の経歴、研究テーマを中心に芥川龍之介、菊池寛、斎藤茂吉らとの交友関係やユニークなエピソード、スライドなどを交えて博士の人物像や学問・研究に対する情熱、貴重な収集資料について語られた。

講演後、同大学内図書館で開催されていた「武藤文庫資料一般公開展」および「武藤文庫」収蔵庫を見学させていただいたが、柴多氏のお話により、種々多様な収集資料を前にして武藤博士についての理解を深めるとともに、貴重資料も興味の幅を広げて見学させていただくことができた。また、展示において見学者に充分なそして印象に残る予備知識を与えることで、展示開催の効果を上げること

ができる実感させられた講演であった。

翌日参加した第2分科会では「文書保存」がテーマとして取り上げられ、全体会において京都大学大学文書館の西山伸氏が「大学における資料保存の現状について - 大学アーカイヴズに関するアンケートにより - 」と題して全国大学史資料協議会会員校59校からのアンケートの回答を集計、分析結果を報告された。

その後の分科会において同氏よりさらに詳細な報告と問題提起が行なわれた。まず第1に所蔵資料の収集方法、整理・分類方法についての問題が取り上げられ、所蔵数が最も多い大学、非現用行政文書については明治大学、個人資料については名古屋大学、図書資料については慶應義塾、写真資料については中央大学が具体的な収集方法および整理方法を報告した。その後各大学の実情や問題点などが挙げられ討議された。次に取り上げられたのは公開についてで、成文化された公開基準をもつ同志社大学、成蹊学園、慶應義塾、甲南大学がその基準について報告、また情報公開法や個人情報保護法のもとでの教授会や個人資料などの取り扱いについて、国立、私立大学の立場から活発な意見が出された。この他教育研究活動や展示活動について問題提起がされたが、時間の関係によりそれぞれ特色ある活動を行なっている名古屋大学と同志社大学が発表を行ない、会を終了した。

この分科会の討議のなかで、資料収集においては中央大学の卒業アルバム掲載写真の収

集方法が印象的であった。卒業アルバムに使われている写真は各時代を反映する貴重なものが多く、写真集などにもよく使用する。これらの写真を収集することはアルバムを収集することと考えていたが、中央大学ではその視点を変えて、アルバム製作をした写真店をたどって写真を収集するという積極的な方法をとられていた。また成蹊学園では各部署にある行政文書の散逸、廃棄を回避するため所蔵資料を調査し、簿冊単位に登録、中性紙のダンボール箱に入れ替えて保存状態を整え、データベースによる目録化を行なっているとのことであった。この調査は必要な文書を廃棄されるという危険性を回避できるうえ、調査依頼があったときも迅速に対応することができる。さらに各部署に重複資料を指摘、廃棄を勧めることで限られた収蔵スペースを有効に活用することができるものであり、このことは大学全体の所蔵資料を把握する必要性を考えさせられるものであった。さらに資料公開においては、個人情報に関する資料の取り扱いは慎重に行わなければならないが、あまり慎重になり過ぎて利用者の調査、研究の妨げにならないよう配慮することが大切であろう。

以上記念講演会および分科会についての感想を羅列させていただいたが、常に全国研究会では大学史に携わっている者にとって身近で具体的な問題がテーマとなり、多くの方々の意見を聞けるため、実際の業務において大変参考になるものである。

### 全国大学史資料協議会 2003年度総会議事録(抄)

日時 2003年10月1日(水) 14時10分～14時45分  
会場 長崎大学経済学部  
新講義棟1階講義室  
出席 <東日本部会>  
神奈川大学、國學院大學、慶應義塾、  
駒澤大学、成蹊学園、専修大学、  
拓殖大学、中央大学、東海大学、  
東京経済大学、東京電機大学、  
東北大学、東北学院、東洋大学、  
武蔵野美術大学、明治大学、  
井上高聡(北海道大学125年史編集室)、

神谷智(名古屋大学大学史資料室)、  
西山伸(京都大学大学文書館)、  
東田全義  
(前慶應義塾・現東日本部会顧問)  
<西日本部会>  
大阪国際学園、関西大学、関西学院、  
甲南大学、神戸国際大学、  
神戸女学院、西南学院大学、  
聖和大学、同志社女子大学、  
同志社大学、広島大学、福岡大学、  
桃山学院、立命館、龍谷大学  
折田悦郎(九州大学大学史料室)、  
原登久雄(元桃山学院年史委員会)、  
山口拓史(名古屋大学大学史資料室)  
東日本部会=28名

(内訳：16大学24名、顧問・個人会員4名)

西日本部会=21名

(内訳：13大学18名、顧問・個人会員3名)

総計=49名

(内訳：29大学42名、顧問・個人会員7名)

\*会場校 齋藤 寛 氏 (長崎大学学長)

若木 太一 (長崎大学図書館長)

井手 弘人 (長崎大学講師)

中田 秀夫

(活水女子大学 学術研究所)

安藝 真由美 (活水女子大学 図書課)

\*講演 柴多一雄 氏

(長崎大学経済学部教授)

姫野順一 氏

(長崎大学環境科学部教授)

都野尚典 氏

(九州情報大学教授・長崎大学名誉教授)

開会司会 桃山学院 西口 忠氏

(西日本部会庶務)

中央大学 松崎 彰氏

(東日本部会事務局)

挨拶 立命館 伊藤 昇氏

(全国大学史資料協議会会長)

議長選出

議長 関西学院 池田 裕子氏

副議長 國學院大学 加藤 貞敏氏

議題

1. 全国大学史資料協議会役員会の報告について(承認事項)

事務局(桃山学院西口忠氏)より、全国役員会での審議経過が報告され、「全国大学史資料協議会規約」第7条の改正が提案された。

規約改正の審議では、個人会員の資格をめぐる質問があり、役員会(中央大学松崎彰氏)より、各個人会員の状況に合わせた柔軟な対応をとる必要があるため、明文化は避けて現行の慣例を踏襲したいとの応答があった後、全会一致で原案が承認された。

また、研究叢書第5号の発行については、西日本部会にて編集を担当し、来年度の刊行を目標としたとの提起があり、審議の結果、全会一致で承認された。

2. 2003年度東西両部会事業計画報告(報告事項)

東日本部会事務局(中央大学松崎彰氏)

・西日本部会庶務(桃山学院西口忠氏)

から、配布資料に基づいて両部会の本年度事業計画が報告され、了承された。

また、東日本部会より『日本の大学アーカイヴズ(仮称)』の編集経過が報告され、協議会会員各位への協力要請があった。

3. その他

西日本部会庶務(桃山学院西口忠氏)から、来年度の総会および全国研究会は京都にて開催する予定であるとの報告があった。

記念講演 15時~17時(公開講演)

挨拶 伊藤 昇 氏

(全国大学史資料協議会会長)

齋藤 寛 氏 (長崎大学学長)

講師紹介 姫野 順一 氏

(長崎大学環境科学部教授)

講師 柴多 一雄 氏

(長崎大学経済学部教授)

演題 「武藤長蔵博士と武藤文庫」

概要 柴多氏は、「長崎学」の三羽鳥に数えられる武藤長蔵博士が残した「武藤文庫」につき、その沿革と収蔵資料の特色を武藤博士の学問研究の軌跡を紹介しつつ報告された。

現在、長崎大学付属図書館経済学部分館に設置されている「武藤文庫」には、和洋図書類約1万冊および地図・書画・陶器等の資料200点が収蔵されているが、これらの資料は、武藤博士の幅広い研究分野を支える基礎資料として、精力的に収集されたものである。武藤博士は、1881(明治14)年愛知県津島市に生まれ、東京高等商業学校(現一橋大学)卒業後、上海の東亜同文書院教師を経て、1907(明治40)年長崎高等商業学校(現長崎大学経済学部の前身)教授に着任、1936(昭和11)年の退官とともに、同校名誉教授の称号を授与されている。また、退官後も同校講師として活躍し、商学教育の発展に尽力した。柴多氏は、武藤博士の専門である鉄道交通・経済学史・日本交通史をはじめとする研究分野と、「武藤文庫」に収蔵されている貴重資料との関連を詳細に解説し、あわせて博士の学究生活や人となりを紹介されながら、諸資料の歴史的な価値に言及した。

なお、柴多氏の講演にあわせて、長崎大学経済学部内付属図書館経済学部分館にて「武藤文庫資料一般公

開展』も開催され、『長崎出島之図』（伝川原慶賀）他の貴重資料を閲覧することができた。長崎大学のご配慮に、あらためて御礼申し上げたい。

以上、講演の詳細については、『研究叢書』第5号に収録予定の柴多氏の論考を参照されたい。

懇親交流会 同日 17時～19時

講演会終了後、17時から長崎大学経済学部新講義棟1階講義室横のラウンジにおいて、懇親交流会を開催した。副会長鈴木秀幸氏（明治大学）開会の辞と、藤江宗一氏（大阪国際学園）による乾杯の発声によって始まった懇親会では、長崎大学齋藤学長をはじめとして、姫野・柴多両教授や活水女子大学中田秀夫先生など会場校各位も交えて、各会員間の情報交換が活発に行われ、終始和やかな雰囲気の中で親睦が深められた。閉会の辞は中村青志氏（東京経済大学経営学部）、司会進行は藤本俊史氏（福岡大学）であった。

（参加者・47名）

## 全国大学史資料協議会 2003年度役員会議事録（抄）

（第52回全国大学史資料協議会

東日本部会幹事会）

日時 2003年10月1日（水）13時～13時30分  
場所 長崎大学経済学部  
新講義棟1階講義室  
出席 <東日本部会>  
神奈川大学（監査委員）、  
慶應義塾（副部会長）、  
國學院大學（会計委員）、  
中央大学（運営委員・事務局）、  
東海大学（運営委員）、  
東京経済大学（運営委員）、  
東洋大学（会計委員）、  
武蔵野美術大学（運営委員・事務局）、  
明治大学（部会長）  
<西日本部会>  
関西大学（会報担当）、  
関西学院（副部会長）、  
甲南大学（副庶務）、  
神戸女学院（幹事）、  
同志社大学（会計）、  
桃山学院（庶務）、立命館（部会長）、

龍谷大学（監査）

- 議題 (1)2003年度総会・全国研究会の運営について  
\*会の運営につき、「全国大学史資料協議会長崎大会準備メモ」にそって挨拶・受付・司会等の担当者を定め、会場を設営した。
- (2)2003年度の東西両部会の共同事業について  
\*『研究叢書』第5号につき、編集担当を西日本部会とし、構成案作成後、両部会にて検討することを申し合わせた。  
\*全国大学史資料協議会としての対外的な事務は、西日本部会事務局を窓口とすることを確認した。  
\*西日本部会庶務（桃山学院）より、次年度の「総会および全国研究会」を西日本部会主催とし、京都で開催する予定であるとの報告があった。
- (3)その他  
\*東日本部会事務局（中央大学）より、『日本の大学アーカイヴズ（仮称）』の編集経過につき説明があり、西日本部会会員各位への協力依頼があった。

## 全国大学史資料協議会 東日本部会幹事会議事録（抄）

第53回 2003年11月20日（木）13時～14時

会場 明治大学 駿河台キャンパス  
大学会館8階 第3会議室

出席 神奈川大学 慶應義塾 國學院大學  
中央大学 東京経済大学 東洋大学  
武蔵野美術大学 明治大学  
谷本 宗生

- 議事 (1)2003年度部会研究会の運営について  
\*研究部会の運営について審議した結果、活動を充実させるためには部会規約全体を見直し、組織を合理的に再編する必要があると結論に達した。  
\*そのため、会長校より部会規約検討委員会設置の必要性が提案され、審議の結果、國學院大學・中央大学・東洋大学・武蔵野美術大学・明治大学を検討委員として規約改正の原案を作成することとし、第1回目の検討会を12月18日に開催することを決定した。  
\*また、規約改正にあたり、現行の委



員委嘱制を委員会制に改め、編集委員会（会報・研究叢書）・研修委員会（研究部会）・特別委員会（記念事業等）の3委員会を設置することを申し合わせた。

- \*さらに、研究部会の準備として開催される研究報告会を、「分科会」として認知し、会員へ公開することも申し合わせた。

(2)編集委員会

- \*事務局（中央大学）より、研究叢書第4号の編集状況報告があり、12月10日納本・年内発送予定・制作費約28万程度との説明があった。

- \*事務局（中央大学）より、『日本の大学アーカイヴズ（仮称）』の編集状況報告があり、各執筆予定者に依頼状を発送した（来年6月末締切り）との説明があった。

- \*会報編集委員（神奈川大学）より、第30号の発行について、今年度全国大会の記録を中心として構成し、来年3月の発行を目途としたいとの説明があり、了承された。

- \*また、編集作業上、校訂料支払いの必要が生じた際の対応について審議され、幹事会にて検討の上、各事例ごとに処理することとした。

(3)その他

- \*慶應義塾より、福田欣治氏の異動と武正恒氏着任のご挨拶があった。

- \*事務局（中央大学）より、企業史料協議会・全国歴史資料保存利用機関連絡協議会と本協議会の合同研究会開催について報告があり、企業史料協議会から送付された企画書を回覧の上、対応を検討した。審議の結果、全国組織としての会長と事務局を担当する西日本部会を窓口とすべきとの意見が大勢をしめ、企画書を西日本部会へ回送して検討をお願いすることとした。また、東日本部会では、来年1月・3月開催の研究部会はずでに決定しており、準備作業も進められているため、実質的に合同研究会開催の準備ができないとの意見も多く聞かれた。

- \*事務局（武蔵野美術大学）より、奈良県立奈良図書館「戦争体験文庫」の資料寄贈依頼について紹介があり、幹事会・研究部会にてパンフレット

を配布したいとの報告があった。

第54回 2004年1月22日（木）13時～14時

会場 駒澤大学禅文化歴史博物館

出席 神奈川大学 慶應義塾 國學院大學  
中央大学 東京経済大学 東洋大学  
武蔵野美術大学 明治大学  
谷本 宗生 西山 伸

議事 (1)2003年度部会研究会の運営について  
\*第2議案「部会規約の改正について」の審議後、研究部会の運営について審議し、今後は研究委員会（仮設）が研究会全般を運営することを申し合わせた。

- \*研究委員会（仮設）谷本宗生氏より、次回研究会の3月開催予定が報告され、了承された。

(2)部会規約の改正について

- \*会長校（明治大学）より、昨年12月18日明治大学において、規約改正の検討会を開催し、改正原案を作成した経緯が報告され、以下3点の改正方針が説明された。

(a) 規約中の字句を修正し、適切な表現に改めた。

(b) 「顧問」を「名誉会員」と改称し、関連条文を一括・独立させた。

(c) 本部会内「分科会」・「部会」等の諸会を「委員会」に統括した。

- \*上記の改正原案を審議し、一部修正の上承認、来年度部会総会に規約改正案として上程することを決定した。

- \*この決定をうけて、規約改正が総会で承認されるまでの間、委員会制を試験的に運用してみてもどうかとの提案があり、前幹事会での申し合わせをふまえて審議した結果、現行の委員委嘱制を廃止し、編集委員会（会報・研究叢書）・研究委員会（研究会）・特別委員会（記念事業等）の3委員会を仮に設置した上で、試験運用を開始することとした。

(3) その他

- \*委員会制の試験運用開始をうけて、編集委員会（仮設）の東海大学・神奈川大学より、研究叢書第4号発行・会報第30号編集状況の報告があった。

- \*事務局（中央大学）より、企業史料協議会・全国歴史資料保存利用機関連絡協議会と本協議会の合同研究会

開催の経緯について報告があり、西日本部会より「西日本部会は開催には関与できないが、東日本部会が参加する際には全国協議会の名義を使用しても差し支えない」との回答をうけた後、会長校の判断で共催を決定したことが報告された。また、会長校（明治大学）より、今回は諸般の事情により、十分な審議を経ないまま回答する結果となったが、今後は研究委員会（仮設）の意向と計画を最優先したいとの説明があり、審議の結果、共催を了承するとともに、幹事会に引き続いて開催される第39回研究部会において、合同研究会開催の経緯を諸会員に説明することとした。

### 全国大学史資料協議会 東日本部会研究部会記録(抄)

第38回 2003年11月20日（木）14時～17時  
 会 場 明治大学駿河台キャンパス  
 大学会館8階 第3会議室  
 参 加 青山学院、神奈川大学、慶應義塾、  
 國學院大學、駒澤大学、成蹊学園、  
 千葉商科大学、中央大学、  
 東京経済大学、東北学院、  
 東洋大学、日本女子大学、  
 武蔵野美術大学、明治大学  
 青柳小百合、谷本宗生、東田全義  
 参加者25名  
 報 告 折田 悦郎氏  
 （九州大学大学史料室 助教授）  
 「国立大学アーカイブ私論」  
 概 要 折田氏は、九州大学大学史料室の設立  
 経緯と活動を紹介しながら、国立大学  
 アーカイブの諸機能と問題点、そして  
 今後の展望について報告を行った。折  
 田氏はまず、従来の大学アーカイブを  
 めぐる議論に触れ、戦略的な理念構築  
 をなすことの重要性を指摘した。また  
 情報公開法に対応した大学アーカイブ  
 の整備が急務との認識に立った上で、  
 その主たる機能を親機関の文書の体系  
 的な収集・整理・保存・公開と位置づ  
 け、今後の大学アーカイブはその本質  
 に向かって機能を収斂させていくべき  
 であると述べた。つづけて図書館や博  
 物館との関係、大学史編纂とアーカイ

ブ、収集史料の問題、研究体制、教育  
 活動、広報・展示活動などに関して多  
 彩な論点が提示された。結論において  
 折田氏は、従来の年史編纂を中心とす  
 る事業のありかたから、自律性をもつ  
 た大学アーカイブの確立に向けて、各  
 大学は発想を転換させていく必要がある  
 ことを強調した。会場からは、年史  
 編纂・展示業務とアーカイブとの関係、  
 私立大学史と国立大学史の姿勢の違い、  
 担当者の人選等について質問があり、  
 折田氏との間で質疑応答が行われた。

（桑尾 光太郎）

第39回 2004年1月22日（木）14時30分～16時30分  
 会 場 駒澤大学禅文化歴史博物館  
 参 加 青山学院、神奈川大学、慶應義塾、  
 國學院大學、駒澤大学、成蹊学園、  
 専修大学、創価大学、拓殖大学、  
 中央大学、東海大学、東京経済大学、  
 東京女子医科大学、東京電機大学、  
 東洋大学、武蔵野美術大学、  
 明治大学、早稲田大学  
 東田全義、小野部朋信、谷本宗生、  
 西山伸、日露野好章  
 参加者30名

概 要 まず禅文化歴史博物館内の博物館実習  
 室において、同館館長岡部和雄氏によ  
 る挨拶の後、同館大学史資料室皆川義  
 孝氏により、「駒澤大学禅文化歴史博物  
 館の開館と現状」と題した報告が行  
 われた。皆川氏は、駒澤大学の創立以  
 来の歴史を振り返りながら、もともと  
 図書館だった耕雲館（東京都歴史的建  
 造物）を利用して現在の博物館を開設  
 した経緯や、関係委員会、開館後の運  
 営状況（同館のコンセプト、組織、施  
 設概要、活動、来館者数等）について  
 報告した。そして皆川氏と同館学芸員  
 塚田氏の案内により、参加者一同で同  
 館作業室、収蔵庫、鑑賞室を見学した。  
 その後二班に分かれて見学が行われた。  
 第一に皆川氏の案内により、同館2階  
 にある大学史展示室において、学寮時  
 代以降の駒澤大学史展示を見学した。  
 第二に塚田氏の案内により、曹洞禅の  
 歴史を中心に構成された1階常設展示  
 室の見学を行った。見学終了後、博物  
 館実習室に全員集合し、質疑応答を行  
 った。会場からは、本建物の耐震構造化  
 およびそれに係る改修費用、大学史と

博物館との間の所蔵資料の棲み分け等  
 に関して質問があった。  
 (谷本 宗生・村松 玄太)

**全国大学史資料協議会  
 東日本部会会員名簿  
 (2004年1月1日現在)**

顧問 竹市 知弘・城田 秀雄・東田 全義  
 会員校名 担当部課室／住所・電話

- 1 愛知大学 大学史事務室  
 〒441-8522 豊橋市町畑町1-1  
 電話:0532-47-4111
- 2 青山学院 資料センター  
 〒150-8366 渋谷区渋谷4-4-25  
 電話:03-3409-6742
- 3 学習院 学習院院史資料室(休会)  
 〒171-8588 豊島区目白1-5-1  
 電話:03-3986-0221
- 4 神奈川大学 大学資料編纂室  
 (監査委員)  
 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1  
 電話:045-481-5661
- 5 関東学院 学院史資料室  
 〒236-8501 横浜市金沢区六浦町4834-1  
 電話:045-786-7049
- 6 慶應義塾 福澤研究センター  
 (副部会長)  
 〒108-8345 港区三田2-15-45  
 電話:03-5427-1603~4
- 7 恵泉女学園 史料室  
 〒156-0055 世田谷区船橋5-8-1  
 電話 :03-3303-6920
- 8 國學院大學 総務部校史資料課  
 (会計委員)  
 〒150-8440 渋谷区東4-10-28  
 電話:03-5466-0104
- 9 国際基督教大学 編年史室  
 〒181-8585 三鷹市大沢3-10-2  
 電話:0422-33-3057
- 10 国士舘 理事長室 広報課  
 〒154-8586 世田谷区若林4-31-10  
 電話:03-5481-3118
- 11 駒澤大学 禅文化歴史博物館大学史資料室  
 〒154-8525 世田谷区駒沢1-23-1  
 電話:03-3418-9614
- 12 実践女子学園 総務部  
 〒191-8510 日野市大坂上4-1-1  
 電話:042-585-8800
- 13 自由学園最高学部 自由学園資料室  
 〒203-8521 東久留米市学園町1-8-15

- 電話:0424-22-3111(内) 217
- 14 上智大学 総合調整室別室  
 〒102-8554 千代田区紀尾井町7-1  
 電話:03-3238-3294
  - 15 聖学院 本部理事長室  
 〒114-8574 北区中里3-12-2  
 電話:03-3917-8332
  - 16 成蹊学園 総務部広報課  
 〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1  
 電話:0422-37-3517
  - 17 専修大学 総務部大学史資料課  
 〒101-8425 千代田区神田神保町3-8  
 電話:03-3265-5879
  - 18 創価大学 創価教育研究センター  
 〒192-8577 八王子市丹木町1-236  
 電話:0426-91-5623
  - 19 拓殖大学 創立百年史編纂室  
 〒112-8585 文京区小日向3-4-14  
 電話:03-3947-7140
  - 20 玉川大学 教育博物館 学園史料室  
 〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1  
 電話:042-739-8643
  - 21 多摩美術大学 企画広報部七十年史編纂室  
 〒158-8558 世田谷区上野毛3-15-34  
 電話:03-3702-1168
  - 22 大乘淑徳学園 長谷川仏教文化研究所  
 〒174-8645 板橋区前野町5-5-2  
 電話:03-5392-8855
  - 23 千葉商科大学 総務第二課史料編纂係  
 〒272-8512 市川市国府台1-3-1  
 電話:047-372-4111(内線747)
  - 24 中央大学 大学史編纂課  
 (運営委員・事務局)  
 〒192-0393 八王子市東中野742-1  
 電話:0426-74-2132
  - 25 津田塾大学 津田梅子資料室  
 〒187-8577 小平市津田町2-1-1  
 電話:042-342-5219
  - 26 東海大学 学園史資料センター  
 (運営委員)  
 〒259-1292 平塚市北金目1117  
 電話:0463-50-2450
  - 27 東京基督教大学 歴史資料保存委員会  
 〒270-1347 千葉県印西市内野3-301-5-1  
 電話:0476-46-1131
  - 28 東京経済大学 100年史編纂室  
 (運営委員)  
 〒185-8502 国分寺市南町1-7-34  
 電話:042-328-7955
  - 29 東京女子医科大学 史料室・吉岡彌生記念室  
 〒162-8666 新宿区河田町8-1

- 電話:03-3353-8111(内22213)
- 30 東京女子大学 大学資料室  
〒167-8585 杉並区善福寺2-6-1  
電話:03-3395-1211(代)
- 31 東京電機大学  
創立100周年記念事業推進本部  
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2  
電話:03-5280-3723
- 32 東京農業大学 図書館  
〒156-8502 世田谷区桜ヶ丘1-1-1  
電話:03-5477-2525
- 33 東北学院 広報室  
〒980-8511 仙台市青葉区土樋1丁目3-1  
電話:022-264-6423・6470
- 34 東北大学 百年史編纂室・記念資料室  
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1  
電話:022-217-5041・022-274-8242
- 35 東洋大学 井上円了記念学術センター  
(会計委員)  
〒112-8606 文京区白山5-28-20  
電話:03-3945-7555
- 36 獨協学園 学園本部事務局総務部  
〒340-0042 草加市学園町1-1  
電話:048-946-1631
- 37 日本工業大学 総務課  
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡  
宮代町学園台4-1  
電話:0480-34-4111(代)
- 38 日本女子大学 成瀬記念館  
〒112-8681 文京区目白台2-8-1  
電話:03-5981-3376
- 39 日本大学 総務部大学史編纂課  
(監査委員)  
〒102-8275 千代田区九段南4-8-24  
電話:03-5275-8036
- 40 法政大学 大学史編纂室  
〒102-8160 千代田区富士見2-17-1  
電話:03-3264-9365
- 41 宮城学院 資料室  
〒981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1  
電話:022-279-7765
- 42 武蔵学園 記念室  
〒176-8533 練馬区豊玉上1-26-1  
電話:03-5984-3748
- 43 武蔵野美術大学 大学史史料室  
(運営委員・事務局)  
〒187-8505 小平市小川町1-736  
電話:042-342-6091
- 44 明海大学  
浦安キャンパスメディアセンター(図書館)  
〒279-8550 千葉県浦安市明海8番地

- 電話:047-350-4997
- 45 明治大学 明治大学史資料センター  
(部長)  
〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1  
電話:03-3296-4085
- 46 立教大学 立教学院史資料センター  
〒171-0021 豊島区西池袋3丁目  
電話:03-3985-2790
- 47 立正大学 企画広報室  
〒141-8602 品川区大崎4-2-16  
電話:03-3492-5165
- 48 早稲田大学 大学史資料センター  
〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1  
電話:03-5286-1814

個人会員

- 1 秋山 俱子(元日本女子大学成瀬記念館)
- 2 安藤 正人(国文学研究資料館・史料館)
- 3 石原 一則(神奈川県立公文書館)
- 4 伊藤 純郎(筑波大学歴史・人類学系)
- 5 井上 高聡(北海道大学125年史編集室)
- 6 上田 絳代(学習院女子大学短大史編集室)
- 7 内山 宏
- 8 内山 佳明(株・ニチマイ文教営業部)
- 9 大沢 泉(八戸大学商学部)
- 10 小川 千代子(国際資料研究所)
- 11 神谷 智(名古屋大学大学史資料室)
- 12 北村 和夫(聖心女子大学文学部)
- 13 坂口 貴弘(駿河台大学[院])
- 14 谷本 宗生(東京大学史史料室)  
(編集委員)
- 15 寺崎 弘康(神奈川県立歴史博物館)
- 16 中村 治人(岡崎女子短期大学)
- 17 中村 頼道(企業史料協議会)
- 18 西山 伸(京都大学大学文書館)  
(運営委員・編集委員)
- 19 日露野 好章  
(東海大学課程資格教育センター)  
(編集委員)
- 20 藤田 正(愛媛県歴史文化博物館)
- 21 古郡 信幸(清泉女子大学学務課)
- 22 水口 政次(東京都公文書館)

会報編集担当

【神奈川大学・大学資料編纂室】

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

☎ 045 - 481 - 5661

【東海大学・学園史資料センター】

〒259-1292 平塚市北金目1117

☎ 0463 - 58 - 1211